

風化させてはならない大震災の記憶

—教訓を活かし危機管理の見直しを

たかぎ すすむ
高木 晋

●日本郵政グループ労働組合（JP労組）・中央執行委員

先般、東京の街にエリアメールが鳴り響きました。東京でエリアメールの音を聞くとゾッとしたのと同時に不安が蘇りました。後に誤作動であることが判明しましたが、本当に地震が発生したらと思うと誤作動で良かったとホッとした次第です。阪神淡路大震災から23年、東日本大震災から間もなく7年目をむかえます。大震災の記憶は風化されてきているのでしょうか。いつ災害が発生しても対応できるような、「命を守る」避難経路・避難場所の確認や、「命を繋ぐ」食料備蓄は意識しているのでしょうか。私は恥ずかしい話、万全だという自信はありません。食料備蓄に関して申し上げれば、一定の備えを用意していますが、避難経路・場所は常に把握しているものではありません。大震災の教訓から、避難経路・場所は解りやすい表示が増えてきていると思いますが、初めて訪れた場所でも、どこに避難すれば命が守れるか、誰でも解ることが重要であります。無論、大人、子供あるいは、障がいを持った方など、全ての方々に理解されなければなりません。常日頃から、「ここで災害が発生したらどうするか」と危機管理意識を持っていなければなりません。また、南海トラフ地震をはじめ、全国各地で大震災が発生する確率が高まっているとの報道がされています。実際に、震度3、震度4といった地震は、全国の至るところで観測され、いつどこで大きな地震が発生するか、予期できない

状況にあります。

先日、熊本を訪れる機会がありました。熊本は、一昨年、大地震が発生し、今もなお不自由な生活を余儀なくされている方々が多くおります。街のシンボルである熊本城は修復工事のため足場で囲まれており、修復までには相当の時間を要する状況が感じられました。また、被害のあった建物の内部には、現在も亀裂の修復が行われていない箇所があるなど、その爪痕は、生々しいものであります。

私は、昨年、一昨年も本誌のご厚情で東北の被災地状況等、記載させて頂きました。東日本大震災を決して風化させてはならないと考えている一人です。一瞬にして尊い命を奪い、故郷の思い出深い大切な光景を変貌させた大津波。後世までその記憶を繋がなければならないと考えています。そして、現在の復興状況等確認いただくためにも被災地に足を運んで頂き、ご自身の五感で感じて頂きたいと思っています。

被災地の復興・再生は、歩み出しているものの、まだまだ道半ばであります。

まもなく7年目をむかえる東日本大震災について、発生当時の状況や現在の復興状況について、報道されることも多い時節となりました。大震災を風化させず被災地に思いをよせ、そして、この教訓を活かす危機管理体制を一人ひとりが考えてみるべきだと私は思います。